

【書評・紹介】

ローランド・エノス(著)、水谷淳(訳)

『「木」から辿る人類史 ヒトの進化と繁栄の秘密に迫る』

(NHK出版, 東京, 2021年, 368頁, 2,300円+税)

田中 佑実

イギリスの生物学者ローランド・エノス著『「木」から辿る人類史 ヒトの進化と繁栄の秘密に迫る』は、人類の進化や歴史を木と人との関係性に基づいて捉え直した作品である。エノスは動植物の工学的なしくみを研究する生体力学の研究者であり、樹木の組織構造や構造材としての用途、樹木の力学的性質や植物を支える根の力学的メカニズムについて研究を行なっている。しかし樹木を通して人類史を解釈し直す試みである本書からは、彼の知見が生物学に留まらず、建築や考古学、人類学にまで及んでいることが読み取れる。

本書における問題の出発点は「人類の進化、先史時代、歴史の解説において、木の果たした役割は決まって無視されている」(p.14) ことにある。これまでの人類学者、考古学者、技術史家、建築史家たちは主に石、青銅、鉄という素材に関心を注ぎ、石器の進化や石器を作るのに必要な知性と手先の器用さ、金属製錬の技術の獲得や金属製の道具に注意を向けてきた一方で、初期の人類による木枝の利用、調理や金属製錬の技術獲得のために焚火が果たした役割、さらには金属製の道具によって木細工の技術が向上した経緯を見落としてきたとエノス是指摘する。これらを踏まえた本書の目的は、木が人類史の中で中心的な役割を果たしてきたことを見直し、木と私たちとの関係性に基づいて人類の進化、先史時代、歴史を新たに解釈し直すことにある (p.17)。本書では四つの年代に分けて、人間の生活における木の役割が描き出されている。

第一部「木が人類の進化をもたらした(数百万年前~1万年前)」では、主に霊長類学を通して樹上から地上生活への人類進化における木との繋がりが木製道具を例に示されている。第二部「木を利用して文明を築く(1万年前~西暦1600年)」では、磨製石斧によって木を効率的に伐り倒すことができるようになった人類が、古代から中世にかけて木をますます有効活用できるようになっていく様子が、木舟による交易や森林の開拓、農耕の開始という側面から記述されている。さらに第二部の後半部では、船や橋、穀物庫、教会を組み立てていく際の木の重要性が示される。中世の石造りの教会を支えるものとしての木が示される点は、木から石へ素材が変化するという建築の歴史を塗り替えるものでもある。第三部「産業化時代に変化した木材との関わり(西暦1600年~現代)」では、産業革命後の木材利用の様子が描き出されている。新素材・新技術がこれまでの木材に取って代わったわけではなく、むしろそれらを活かして木の使い方が改良され、より木が活用されるようになったことが述べられる。第四部「木の



重要性と向き合う」では、私たちが木を利用することによる森林や環境への影響が指摘されている。広葉樹や原生林の面積縮小といった人類の森へのダメージは、文明が繁栄するに伴い大きくなっていった。建材や木工材だけが有用な資源であるとされたために、成長が早く幹がまっすぐな針葉樹が植林され、それによって生物多様性の低下や病虫害の発生といった森林や環境への影響が表出していることが指摘されている。また、私たちは祖先たちが持っていた自分でものを作る能力を失っていることが述べられ、自ら木材を扱い、何かをつくるといった木に触れる重要性が示されている。そのことを受けて、本書の最後では再自然化運動が提唱されている。再自然化運動に関する記述の中では森林文化がとりわけ盛んな国として、フィンランドが挙げられている。評者はフィンランドの木と人の関わりを研究テーマとしているため実際の事例と結びつけながら批評していきたい。

木が人類史の中で中心的な役割を果たしてきたことを見直し、木と私たちとの関係性に基づいて人類の進化の歴史を新たに再解釈するという本書の目的は十分に達成されている。フィンランドにおいても長く人々の生活を支えていたものは木である。中央フィンランドのペタヤヴェシという町に作られた中世のルーテル派教会は、装飾、シャンデリア、椅子、全てが木で作られている。また農家では、近代まで木のこぶなどをくりぬいた器が使われていた。貧しさの中で飢饉が何度も人々を襲ったフィンランドでは、樹木さえも食料となった。松の木の下層部分を乾燥させて砕き、生地にして焼いたパン（pettuleipä）が人々の命を繋ぐこともあった。そして近代から現代にかけて、フィンランドの経済を支えてきたものもやはり樹木であった。

しかし、木と人の関わりは本書で記述されたような木の利用の側面に限られない。それはフィンランドだけでなく、日本、そして本書で紹介されていたようなヨーロッパやアメリカ大陸でも共通する、精神的な木との関係である。世界各地の神話において、生命樹は頻繁に描かれる。神話で登場する象徴的な樹木だけでなく、人々の実生活においても木は人々の生活を支え、家族の運命と繋がるものであった。フィンランドでは古くから、家の横には一本の大きな木があり、そのような木はピタミュスプウ、ウフリプウ、ハルティアプウ、エラッティプウ（pitämyspuu, uhripuu, haltiapiuu, elätipuu）といった様々な名前と呼ばれた。定期的にその樹木の根元には贈り物がなされ、家族の繁栄が願われた。その木が倒れることは家系が途絶えることを意味するとも考えられた。人は生きていくために木を利用する一方で、木と精神的な繋がりを持っていた。伐り倒す木がある一方で、決して伐り倒してはいけない木があった。その一見矛盾するような繋がりをも木と人は築いていたのである。

今日、樹木と人の関わりについて話をする際、議論はこの二つの関係の間で分かれてしまうように感じている。すなわち物質的な側面を持つ木と人のつながりと精神的な側面を持つ木と人のつながりである。近代化を経験した人類は、その過程において既に木との精神的な結びつきをそぎ落としてしまったのだろうか。フィンランドにおいても林業を中心とする産業化の過程で、聖なる木までも伐り倒され、人間の利益中心による扱いがなされた。しかし、今日の森林伐採に対する抗議の声から察するに、森や木に対する親しみや尊敬が人類の中から完全に切り落とされてしまったわけではないだろう。恐らく問題は、物質的な側面を持つ樹木と精神的側面をもつ樹木の繋がる地点を現代の私たちが見失っていることにある。その地点を考察することが、木と人の繋がりを本当の意味で考えることに結びついてくるのだろう。その過程で、石や青銅や鉄とは異なる木の独自性と人類との繋がりが浮かび上がるように思う。

さらに指摘すべきは、本書で述べられていた原生林の減少についてである。現在のフィン

ランドの森はほとんどが 18 世紀から 19 世紀にかけての産業化以降に植林されたもので「原始」の森はほんのわずかしかない。今日フィンランドにおいて伐採を経験したことのない森は 5% しかないと言われている (Tolvanen 2011 : 59)。近年になってフィンランド経済を支えてきた林業が森に大きなダメージを与えてきたことが指摘され始めた。日本語でも翻訳された“*Metsä meidän jälkeemme*” (邦訳図書『フィンランド 虚像の森』)では、原生林や老生林の面積減少が古い森にしかすむことのできないフクロウのような生き物たちに影響を及ぼしていると記述されている。また原生林を一斉伐採し、より利益を得やすい針葉樹を植林したことで、木材として質の悪い樹木が育っていることも確かであるから、長いスパンで見たときの原生林の減少は、そこに住む動植物だけではなく人間にも影響を及ぼしていると言える。

今日の人類学の潮流の一つ、存在論的転回以降の議論のなかでも、植物は改めて捉え直しの段階にある。例えば植物人類学の重要性を説く人類学者の箭内匡は、人類学が考察対象を「人間」から「人間とそれを取り囲む諸存在との関係」に拡大しようとする時、地球上の多細胞生物の 99%を占める植物はまず視野に入ってくるべき存在である (箭内 2020 : 51) と説き、存在論的転回におけるアニミズムについての議論が動物中心であったこと自体、先住民が生きる現実の全体を正確に反映するものではなかった可能性が大きい (箭内 2020 : 58) と指摘している。植物の捉え直しは植物学からも行なわれており、植物の構造や思考に関する議論が繰り広げられ、人間中心主義を揺るがす展開が目指されている。

本書はこれまで石や青銅、鉄の利用が優勢だった人類史を、あまりにも身近で、または石や鉄よりも脆いものとして、文明の下位段階に位置づけられ、見過ごされてきた木から新たに描き出した点で、植物の捉え直しという大きな学問的な議論の流れの中に位置づけることができる。本書の議論は直接的に存在論的転回以降の人類学におけるアニミズムや植物から人間への行為主体性に関する議論とは結びつかないが、これらの議論を下支えする知識として重要なものだと言える。植物、中でも樹木を研究テーマとする評者にとっても、霊長類の木の利用や萌芽更新などの断片的な木に関する知識が本書によって一つの流れをもって示されたことは、大変意味のあることだった。建築や工芸、ご神木など、物質的にも精神的にも樹木との関係が深い日本の読者の心にも届きやすい本と言えるだろう。ぜひ皆さんにも手にとっていただきたい。

引用文献

ヨキランタ, A. & ユンツァー, P. 他

2022 田中淳夫 (監訳)、上山美保子 (訳) 『フィンランド 虚像の森』新泉社、東京、
箭内匡

2020 「スピノザと「植物人類学」—アフェクトゥス概念の人類学的一展開」 西野涼子、箭内匡
(編)『アフェクトゥス—生の外側に触れる』京都大学学術出版会、京都、43-69.

Tolvanen, M.

2011 Alkuperäinen metsä muutoksessa. *TIETEESSÄ TAPAHTUU* 29(6):59-61.

(たなか・ゆみ／北海道大学)